

テーマ別作品紹介

回復期リハビリテーション病院

豊かな療養環境をつくる

- 医療法人社団 輝生会
初台リハビリテーション病院
- 一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院
- 医療法人 珪山会
鵜飼リハビリテーション病院
- 医療法人 東樹会
あずまりリハビリテーション病院
- 医療法人 愛の会 光風園病院
回復期リハビリテーション病棟

(株) 岡田新一設計事務所

岡田新一設計事務所のリハビリテーション病院づくり

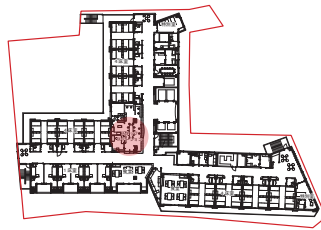
明日への希望　ーソフトとハードの「支え合い」をデザインー

1 環境から建築を紡ぎだす

回復期リハビリテーション病院に与えられた使命は、一度病に倒れた患者に、再び社会生活を送る意欲と希望を持ってもらうことにあります。私たちが設計したリハビリテーション病院は患者個人や地域の生活圏とつながりをもった計画としています。

そのため、敷地条件は一つとして同じものはありません。私たちはオーナー様と打ち合わせを重ねながら、その土地でしか生み出せない価値を病院に織り込んでゆきます。

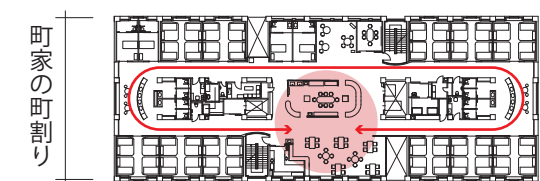
ー都心の不整形な土地につくる



ex:初台リハビリテーション病院

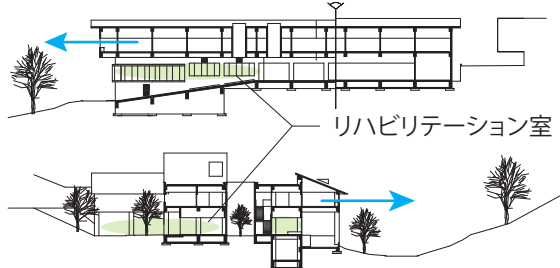
不整形な敷地ながら、要にスタッフステーションを設けて3方向へ均質なアクセスをとるバランスのよい平面計画を実現

ー町割りにあわせてつくる



敷地奥行きがある町家由来の町割りを生かしてリハビリテーションに役立つ回遊性と、スタッフ詰所まわりの豊かなスペースを実現

ー山あいの斜面につくる



ex:光風園病院

回復期リハビリテーション病棟

敷地の高低差を生かし、リハビリテーションの場に接地性をもたせ、病棟からは美しい四季折々の景色を堪能できるように計画。

2 生活の場作りとトイレ

日常生活にもどるための一歩として、排泄が自分でできるようになることが大きな目標となります。一方、トイレは完全なプライベート空間です。その中で転倒による事故や、使いにくい介助具で自立が遅れるようなことがあってはいけません。私たちは使いやすく安全なトイレを、実際に介護にあたるスタッフとモデルを用いて検証しています。使い手と介助者が使い方を相互理解できる個別解がそれぞれの病院に根付いています。

ートイレネットワーク



集中型トイレ配置

分散型トイレ配置

ex:あづまりリハビリテーション病院と初台リハビリテーション病院の比較

トイレまで移動することがリハビリテーションです。私たちはスタッフのご意見を伺いながら、トイレを病棟の中に分散、集中配置するかを検討します。スタッフの意見に根ざした「トイレネットワーク」の構築はリハビリテーション病院計画の要諦といえます。

ー介助具とその使いこなし方を検証



鵜飼リハ



光風園病院

ex:鵜飼リハビリテーション病院と光風園病院のトイレ比較

昨今、様々な介助具が開発され、トイレを使いやすいものになっています。そういったものを一つ一つ検証しながら、病院にとって本当に必要な器具を取り入れてゆきます。

3 リハビリテーション空間

患者にとって、2、3ヶ月の間は病院が生活の場です。病院での活動すべてが患者にとってはリハビリテーションです。スタッフは患者の自立を暖かく見守り、支えてゆく存在です。そんな理想をつつむ場合は、機能性や合理性が前面に押し出された場ではなく、さりげない佇まいのなかに見守り視線や、自立のための工夫がちりばめられているような場のほうが心地よい、という発想が私たちのリハビリテーション病院づくりの原点です。

ー病室内・家具の扉



ex:あづまりリハビリテーション病院病室家具

病室内の家具は転倒による事故をさけるために突起物を排しています。また、つかんだり、引っ張ったりする力が衰えていても、扉の開け閉めができるように工夫しています。

ー見通しのよいワンルーム



ex:光風園病院リハビリテーション室

最大24mの無柱空間と外部に開かれたリハビリテーション室。

ー屋上庭園



ex:長崎リハビリテーション病院屋上庭園

4 働く場としての病院

回復期リハビリテーション病院では複数のスタッフが一人の患者に対して、それぞれの専門分野をもって協力的なチームを組織し、支える点が特徴です。従って連携がとれた医療行為を施すためには、スタッフ同士のコミュニケーションの場を用意することが重要です。これは、スタッフ専用の場所を用意することだけでなく、病院全体で、スタッフ同士が声を掛け合いやすい環境をつくることが重要と考えています。

ースタッフコミュニケーションの場



ex:長崎リハビリテーション病院 サロン

2階はスタッフ階であり、要の位置に重要なコミュニケーションの場を提供しています。

ースタッフ同士の学習の場



ex:鵜飼リハビリテーション病院 サロン

食堂となることはもとより、70席程度の会議室にも転用できるしつらいです。

ー気持ちよく働ける場



ex:光風園病院スタッフステーション

天窓からのお日様の光が職員の顔を明るく見せます。活気のある病院づくりに役立ちます

5 社会とつながる

患者はリハビリテーションを重ねて、また社会へと戻ってゆきます。病院は隔離された場所ではなく、大きなデザインのストーリーをもって、社会、ひいては自然環境とつながりをもって欲しいとのオーナー様の理想をさりげなく表現してゆきたいと考えています。

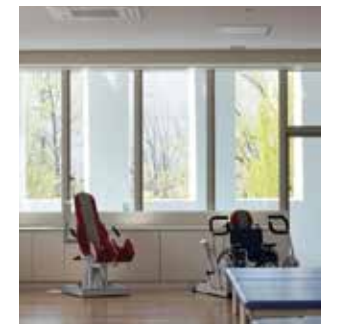
決して華美なものではなく、日常生活の中でそれとなく醸し出される心地よさを建物の中に織り込んでゆきたいと考えています。

ー裏通りをつくらないカラフルな壁



ex:初台リハビリテーション病院

ー光のコントロール



ex:あづまりリハビリテーション病院

ー大海原に続く水の流れと木々のそよぎ



ex:光風園病院

初台リハビリテーション病院

東京都渋谷区本町3-53-3

延床面積 : 13,046.32㎡

階数 : 地下2階・地上8階・塔屋1階

病床数 : 173床

開院 : 2002年6月

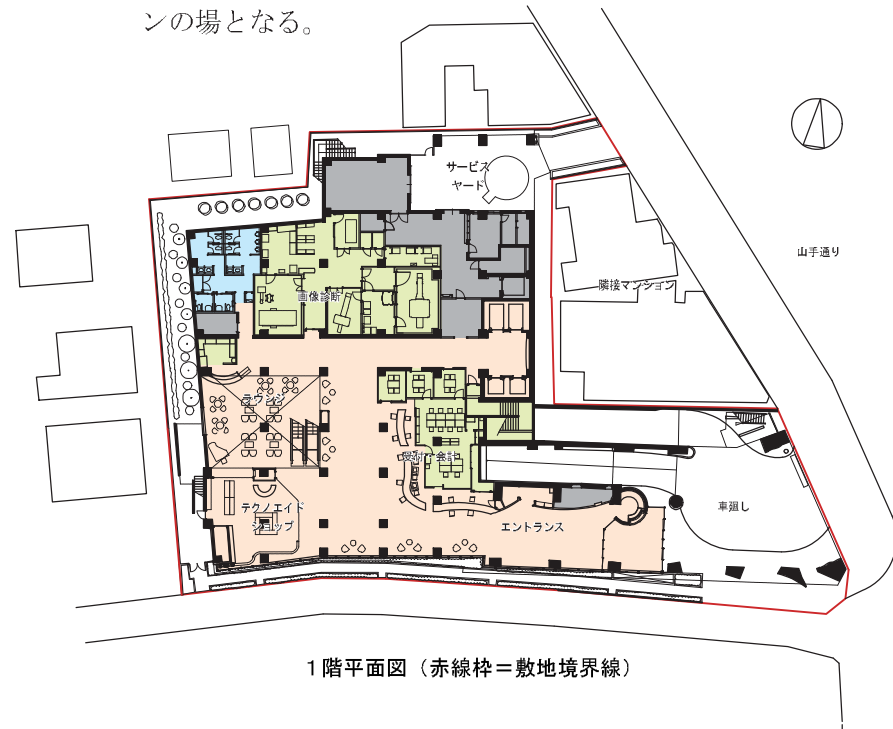
都市型リハビリテーション病院の新しいかたち

■これまで経営上困難といわれていた都心に立地する、新しい都市型リハビリテーションの拠点のひとつとして計画された。これからの回復期リハに求められる医療サービス方針を踏まえ、いわゆる病院らしからぬ、より家庭に近い環境を実現している。

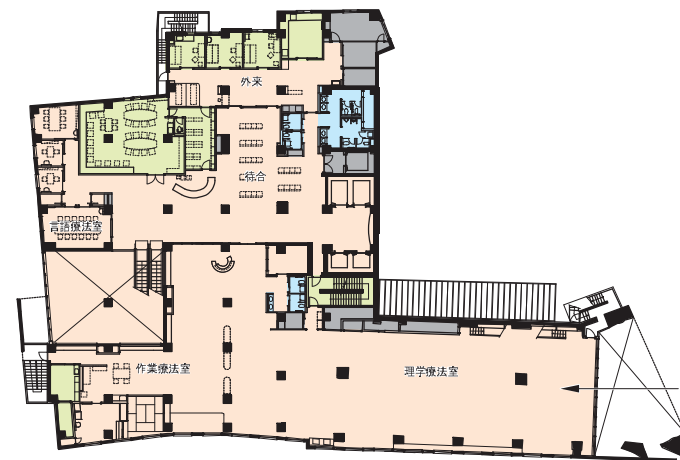
■前面の山手通りは今後、大人がそぞろ歩きできるストリートとして発展することが期待できる。その街に語りかける落ち着きと彩りのある外観。また、ピロティ越しに理学療法室の様子が見える構成、側面の狭小の道路に対して歩道を提供するなど、都市との関わりを重視している。それは地域リハ、ノーマライゼーションの実現をめざす当病院の基本理念に合致する。また、法規制など制約の多い敷地条件の中で、5層にわたる病棟を効率よく運営できるような構成にまとめている。

■2階のリハビリテーション部門は約1,000㎡（施設基準の2倍以上）を確保。面積が広いだけでなく、理学療法室と作業療法室が一体で柱の少ない大空間となっており、ゆとりのあるリハビリテーションが行える環境を整えている。

■2層吹抜けになっている1階ラウンジは、パブリックゾーンの中心的空間となっている。入院患者・外来患者にとっても、室内の「広場」として、コミュニケーションの場となる。



正面外観 山手通りから2階理学療法室の様子が見える



2階平面図



カラフルな柱と近隣に配慮して整備された歩道街並みに彩りと豊かさを与える



エントランスより受付・ラウンジ方向をみる



コーヒーの香りが漂うラウンジ



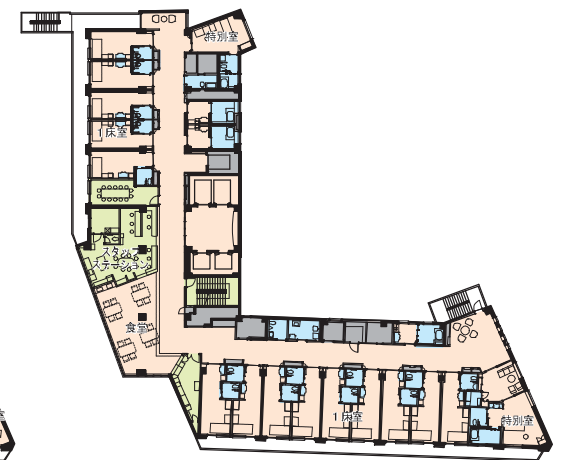
広く明るい理学療法室・作業療法室



ラウンジで行われるコンサート



＜一般病棟＞
4階平面図（48床）・・・3階：48床
5階：45床
6階：管理フロア



＜特別病棟＞
7・8階平面図（各16床）

0 10 20m
scale 1/800

初台リハビリテーション病院

社会復帰・家庭復帰をめざすステージとしての病棟

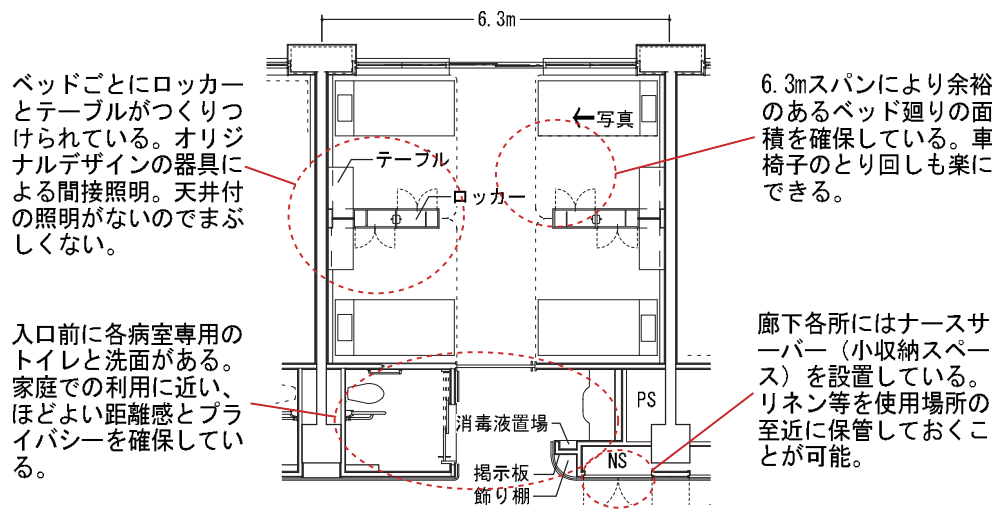
- 入院患者にとって病棟は、治療・リハビリテーションの場であると同時に、日常生活を営む“いえ”でもある。入院生活と退院後の生活が滑らかにつながるように、病院としての機能と住宅的な生活環境の高い次元での融合を試みている。
- 造りつけの家具でゆるやかに間仕切られた4床室は、患者ごとの落ち着いたプライベート空間を生み出している。また、各病室の前室部分にトイレと洗面を設けて、ベッドからの利便性とプライバシーを両立させている。
- 1床室にはトイレ、洗面、ワードローブ等を設けたうえで、ベッドサイドで車椅子が余裕を持って動ける広さを確保している。また、特別室は水回り等を含めてさらにゆとりのあるつくりとなっている。
- 備品の家具、カーテン、ベッドカバー等を全て含めたトータルな色彩計画や、やすらぎと省エネ効率の両立をはかった照明計画がなされており、統一感のある落ち着いたインテリアをつくりだしている。
- 病棟の廊下には飾り棚や掲示スペースがあり、病室ごとの個性を演出することができる。また、3方にのびる廊下のつきあたりには、デイコーナー（談話スペース）を設け、光の取り入れ方や木製椅子のレイアウトを変え、それぞれに個性を持たせている。
- 7・8階は全個室の特別病棟（1床あたりの病棟床面積は一般病棟の約2倍）。仕上げ・設備などの面でも一般病棟よりグレードをあげている。



4床室



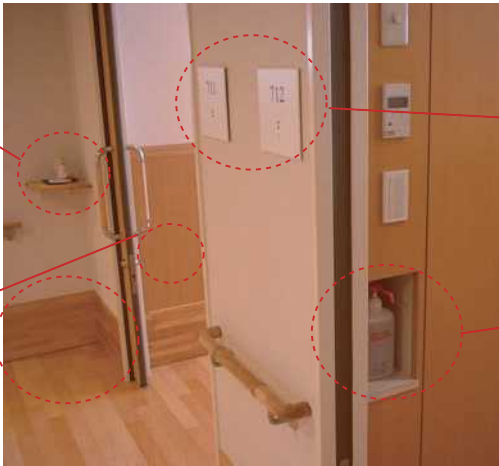
7・8階1床室



4床室平面図

病室の入口には飾り棚や掲示板があり、病室ごとの個性を演出することができる。

廊下・病室ともに木を効果的に使用したインテリア。



7・8階1床室入口廻りのしつらえ

病室の室名サインは、患者のプライバシーを重視し、部屋番号のみを表示。ナースコールランプは緑色。

消毒液置場は、廊下から直接見えず、患者の行動の障害にもならない場所に設置。



7・8階東特別室 前室付きで最も大きい専有面積を持つ



7・8階食堂 ゆとりのある面積と眺望が得られる



3階食堂 パントリーをはさんで2ヶ所に分かれている



廊下の突き当たりにあるデイコーナー 2方向の光で、くつろぐ人の表情を生き生きと見せる

一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院

所在地 長崎県長崎市
構造・規模 RC造 地上6階 塔屋1階
敷地面積 2,353.37㎡
延床面積 9,312.00㎡
病床数 143床
竣工 2007年11月(Ⅰ期)
2014年 2月(Ⅱ期)

眼鏡橋に程近い銀屋通りには、かつて銀細工の店が軒を連ねていた歴史がある。一軒一軒の敷地は間口が狭く奥行きの深い典型的な町屋で、その地割りは現在にまで引き継がれている。よって規模のある敷地なり的一块では、これまでのまちづくりの作法に反する。

そこでいくつかのブロックに分け、さらには3階までと4階以上で窓の開け方や外装タイルの色使いに違いを持たせて、周辺のスケール感と違いすぎないように配慮した。それはこの病院が目指すリハビリテーション、すなわち患者が家庭や社会に復帰するために、体の回復とともに、心・生きる意欲の回復も促す基本方針と符合する。いわゆる病院らしくない家庭のような温かさが求められた所以である。また専門領域の違うスタッフによるチームアプローチ促進のため、各階とも中央エレベーター前に中心空間のある構成とした。3階管理ゾーンでも自由な雰囲気のオープンスペースがスタッフ交流の拠点となっている。

通りからも伺えるインテリアデザインは、いわゆる病院らしくない雰囲気がキーワードとなっている。患者が家庭や社会に復帰されるために、この病院が目指すリハビリテーションとは、体の回復とともに、心・生きる意欲の回復も促すことでもある。従って家庭のような温かさが大切となる。栗原理事長はじめ、スタッフの方々の熱い思い、これを少しでもはっきりと感じ取れるような雰囲気づくりを設計の上で心がけた。



屋上庭園はリハビリの散歩ルートとしても活用

銀屋通りに面したエントランス



アクティブホール（理学療法・作業療法室）



デイケアセンター



スタッフサロン



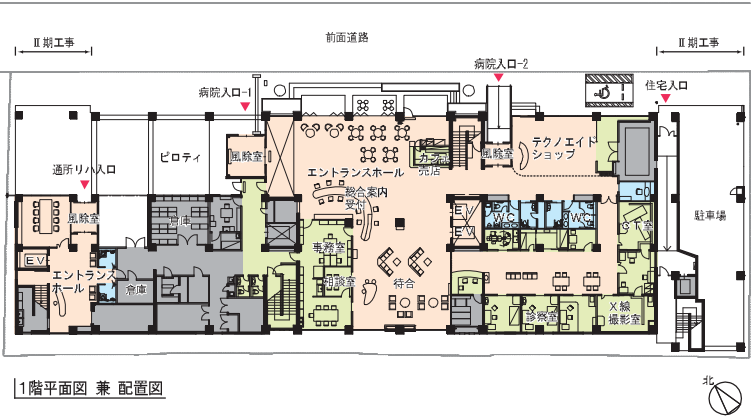
病棟のデイルーム・食堂



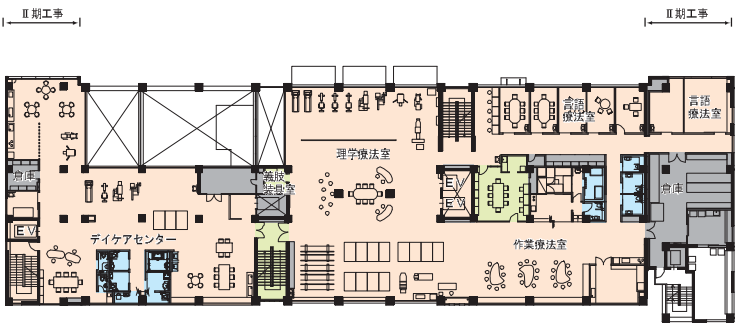
4床室



デイコーナー



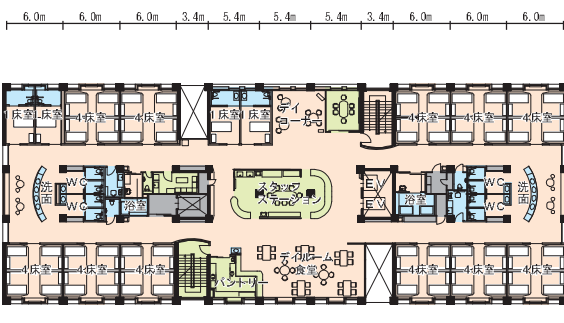
1階平面図 兼 配置図



2階平面図



3階平面図



4・5・6階平面図（病棟階各47-48床）

医療法人 珪山会

鵜飼リハビリテーション病院



所在地	愛知県名古屋市市中村区
構造・規模	RC造一部S造 地上6階 塔屋1階
敷地面積	3,059.97㎡
延床面積	9,057.36㎡
病床数	150床
竣工	2011年4月

名古屋駅から地下鉄で1駅、主要幹線道路の交差点に面する。1階エントランスホールの歩道側を吹抜け空間としたのは、その都市スケールにあわせるとともに、「公共空間」の延長として地域とつながりを持たせる意図がある。明るい雰囲気と声を掛けやすいオープンカウンター、すぐに相談に応じられる多くの相談室を配し、地域とともにある病院の基本理念の具現化を目指した。この都市との中間領域となる空間は、コンサートなどの会場として、また訓練の一環でもある散歩にも出やすく、患者の社会復帰を後押しする役割も大きい。

病棟階はL型平面の交点にタテ動線およびスタッフステーションを設置し、動線の短縮とともに全体を把握しやすい計画としている。廊下の突き当りは窓からの光で明るく、閉塞感を感じないように心掛けた。スタッフステーションに隣接する食堂兼談話室は、昼間は普段着に着替える患者の居場所としての広さを備えている。ミーティングルームを含めたこの一帯の視線のつながりを重視し、スタッフ間のコミュニケーションを取りやすくした。

リハ階（理学療法・作業療法・言語療法、デイケア諸室）は最上階に設定し、トップライトからの自然光と3.8mの天井高、柱を一部抜いて広々とした明るい空間を実現した。

これまで「初台リハビリテーション病院」「長崎リハビリテーション病院」の設計を通して学んできたことは、「病院らしからぬ…」とはいっても、一夜勝負の演出が求められる「ホテル」ではなく、日常の「なんとなくいい」感じのさりげなさが望まれるということであった。



南東側からの外観，交差点に面する



エントランスホール 脳血管障害で入院されていた教諭がリハの一環としてピアノを弾いていた



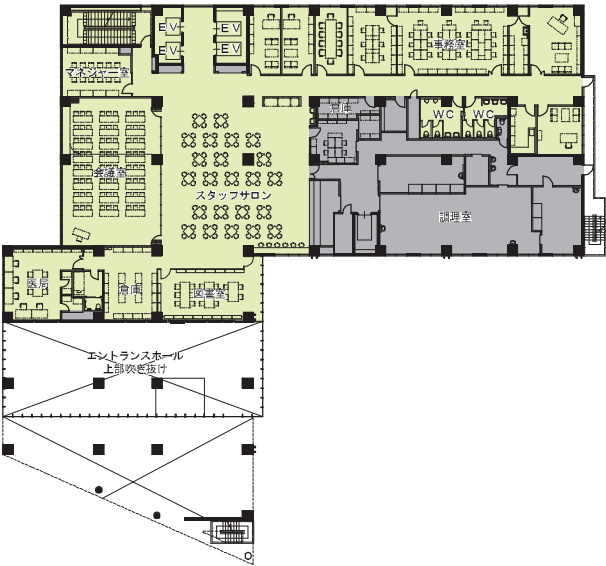
幹線道路から引きをとって，緑地と散歩ルートを確保



交差点から夜のエントランスホールをみる



1階平面図 兼 配置図



2階平面図



3・4・5階平面図（病棟階各50床）



6階平面図

0m 5m 10m 15m 20m



個室感のある4床室



1床室



スタッフステーションと食堂



デイケアセンター



トイレはいずれの片麻痺にも対応できるレイアウト



スタッフサロン

チームアプローチ

回復期リハビリテーション病院では、患者の自立を支援するDr. Ns. PT. OT. ST. MSW. CWなどのスタッフも病棟を拠点とし、それぞれの専門分野をもって強力なチームアプローチを行う点が急性期病院との顕著な違いである。他職種との情報の共有化、お互いの専門性を理解しつつ、一人ひとりの患者に連携の取れた医療行為を施すために下記に配慮した。

- ①一体感を醸し出す空間の中で、スタッフ同士が声を掛けやすい雰囲気
- ②同じ職種あるいは他職種とも、切磋琢磨しやすい環境整備
- ③スタッフにとっても温かみを感じる室内外のデザイン

2階はスタッフ階として計画し、約100席の食堂を用意し、時間外はスタッフ間のコミュニケーションの場として自発的な使われ方が可能な設えとしている。隣接する約70席の会議室間のガラスパーティションを開放すれば、大規模な講演会やイベント会場にもなり、また会議室をパーティションで2分割すれば、25～40席程度の会議にも対応できる。食堂隣にスタッフ室（図書室）および作業用具などのストックスペースが付随させているのも回復期リハビリテーション病院ならではの配慮で、スタッフ同士の活力を生み出す共有基盤となることを意図している。

病棟・病室計画 モデルルームで検証

4床室、1床室、廊下、トイレの実物大モデルルームを作り、使い勝手や色や素材感、耐久性などを、設計指導をいただいた石川誠先生、寛淳夫先生を交え、病院スタッフと検証するプロセスを共有したことで、関係者全員の共通認識を高めることができた。

左右どちらに麻痺をもつ患者でも対応できるベッドレイアウトの確認、家具の収納量やサイズ、デスクの使い勝手、照明器具の位置、手摺の形状など、モデルルームの改善を重ね、繰り返しの検証作業を続けた。

急性期病院とトイレの計画も大きく異なる。片麻痺患者への対応から、器具レイアウトを左右対象とするだけでなく、便器の高さや手摺、紙巻器やスイッチ類などの位置をミリ単位で検証し、回復期リハビリテーション病院のスタンダードとなりうるものを目指した。



①メーカーショールームで選定予定の実物を確認、標準取付高さにて使い勝手を検証し、モデルルームに反映



②既存病院のトイレにて、実際に介護にあたっている職員から、片麻痺患者の特徴をヒアリング



③既存病院に洗面台を持ち込み、高さを事前に検証



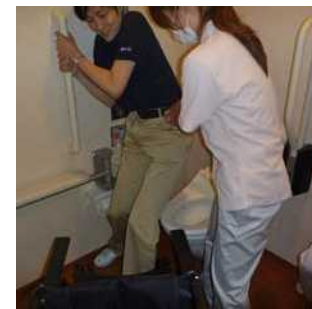
④便座まわりの手摺、前方ボード、紙巻器などの取付位置をシミュレート



⑤モデルルーム初回検討会。前方ボードは回転式より跳ね上げ式が良い。次回検証までに置き換え



⑥便座の高さが女性には微妙に高いのではないかという意見、次回検証までに調整



⑦介助している職員も交え、移乗時の車椅子と便座、職員の位置の関係をシミュレート



⑧床頭台コンソールに病院で使用している最大サイズの吸引ビンが納まることを検証



⑨石川誠先生もモデルルームで初台・船橋リハの実際の使い勝手を踏まえて検証を行っていただいた



⑩家具の収納量、取手の使いやすさ、デスクの広さなどについてもアドバイスを頂いた



⑪4床室の家具の高さの検証。1.6mあれば、隣からベッドへの視線は通らず、かつ個室感もあることを検証



⑫窓側トイレタイプの1床室についても検証。ダウンライトをベッドから眩しくない位置に移動



⑬寛淳夫先生にも車椅子に乗っていただき、患者視線での使い勝手を検証していただいた



⑭片麻痺の方の移乗の動きについて、看護師長から説明していただき検証



⑮小便器はどのような姿勢で使うことができるか、片麻痺の方はどのように手摺を使うかシミュレート



⑯病室入口のウェルパス置場の大きさも数種類の容器サイズで検証を行った

医療法人 東樹会

あずまりハビリテーション病院



所在地 愛知県名古屋港区
構造・規模 RC造 地上5階
敷地面積 2,231.62㎡
延床面積 5,415.80㎡
病床数 90床
竣工 2013年3月

あずまりハビリテーション病院が立地する名古屋港の敷地周辺には、高層の集合住宅や事務所ビル、倉庫など大柄の建築が、明快な規則性を持たずに建っている。色彩も多くは白茶系や薄灰色など無難でやや唐突に派手な色も混じり、調和のとれた景観形成はこれからの課題といえる街並みである。よって周囲の規模の大きな建築に負けないスケール感のある形態でありつつ、人の営みを感じさせる要素をも合わせ持つ建築づくりを目指した。具体的にはカーテンを閉めなくても日除け効果を獲得できる外壁から1m離れた南面の白壁、エントランスへの道ゆきを彩る病院のシンボルカラーで染めた耐候性鋼板とタペストリー加工を施したデザインガラス。外壁は透明感と光沢のある特注青磁色磁器質タイルを平滑と波模様入を水平な帯状に貼り分けるなど…。回復期リハ病院では、患者の自立を支援する、Dr. Ns. PT. OT. ST. MSW. CWなどのスタッフも病棟・リハ階を拠点とし、それぞれの得意分野をもって強力なチームアプローチを行う点も急性期病院との顕著な違いである。他職種との情報の共有化、お互いの専門性を理解しつつ、一人ひとりの患者に連携の取れた医療行為を施すため、①一体感を醸し出す空間のなかで、スタッフ同士が声を掛けやすい雰囲気 ②同じ職種あるいは他職種とも、切磋琢磨しやすい環境整備 ③スタッフにとっても温かみを感じる室内外のデザイン などにも配慮した。今回特に意識したのは、①界索性（回遊性）を持ち、巡る風景に変化があること（無機的でないこと） ②明るい空間に包まれていること ③スタッフの姿が生き生きと感じられる空間性能をもつこと ④優しさを演出する照明 などである。



南側外観 外壁から1m離れた白壁が、建物に軽やかなリズムを与える



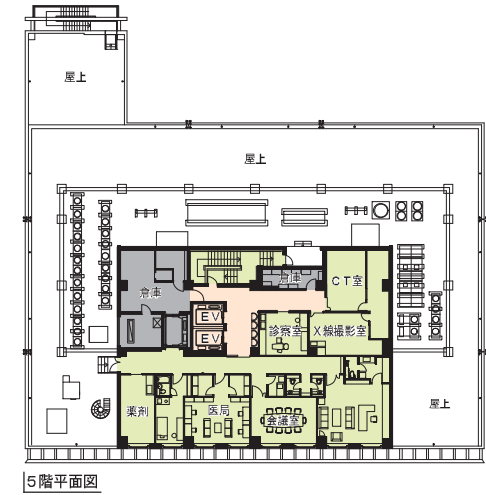
温かみのある照明計画 夜景をより鮮やかに魅せる白壁



白壁が直射光を柔らかくして、周囲の色を取り込む（南面であるがブラインド不要）



「母なる大地」をテーマとしたガラス



5階平面図



3・4階平面図（病棟階各45床）



2階平面図



1階平面図



耐候性鋼板とデザインガラスで彩ったアプローチ



エントランス・受付



2～3ヶ月入院に対する収納量、使い勝手に配慮した間仕切り家具により、個室性を高めた4床室



明るい窓周りと落ち着いた色合いの特別室



左右いずれの片麻痺にも対応できるようにトイレは二対で整備

医療法人 愛の会 光風園病院

回復期リハビリテーション病棟

山口県下関市長府才川2-21-2
延床面積：17,744.16㎡（うち増築部3,308.84㎡）
階数：地下1階・地上3階・塔屋1階
病床数：210床
竣工：2013年12月

長府の地に、二つとない病院をつくる

- ＜病院と一緒に取り組んだこと＞
- 長府の地にしかない病院をつくる。
 - ここに来たら元気になれる！という病院の顔をつくる。
 - 春夏秋冬、四季がどこでも感じられる病院をつくる。
 - スタッフがお日様の光を感じながら気持ちよく働ける病院をつくる。



特徴的な赤い瓦屋根の民家



既存病院から瀬戸内海を望む



緑の山々と瀬戸内海に囲まれた食堂・リハビリテーション室

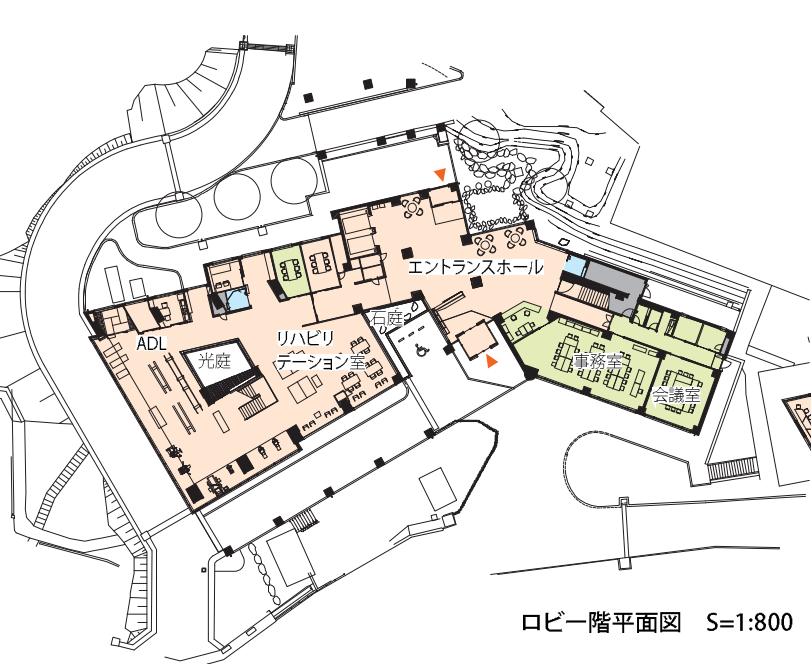


左：院長先生が先代から引き継いだ病院は、少しずつ建替増築をくりかえして現在の形になった。
30年のながきに渡り、院長先生が目指した理想の病院の最後の要諦を私達にお任せいただいた。

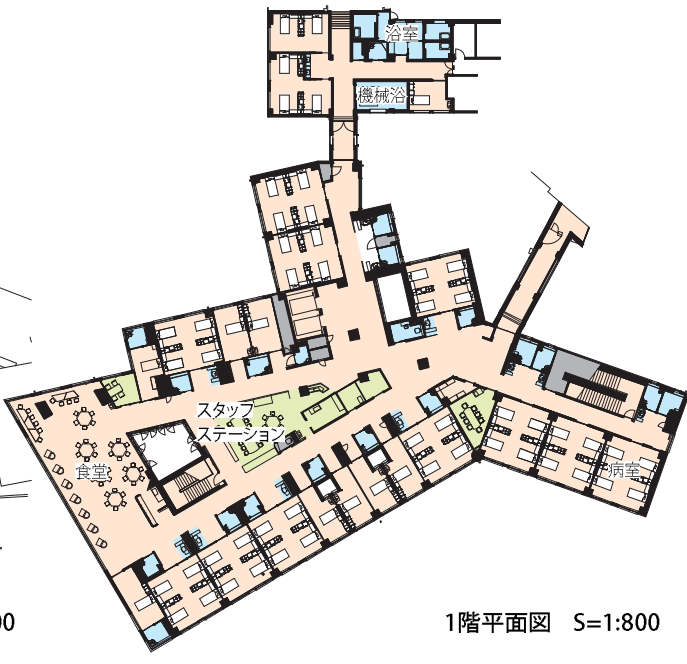
敷地の高低差を活かし、長府の街に長く根を下ろす病院となるよう、院長先生と話しあいながら設計を進めた。

右：院長先生が30年間にわたり植え続けた多種多様な桜は毎年春になると、一斉に咲き誇る。病院の職員の言葉を借りれば、まさに「狂い咲き」としか言い表しようなない素晴らしいさである。

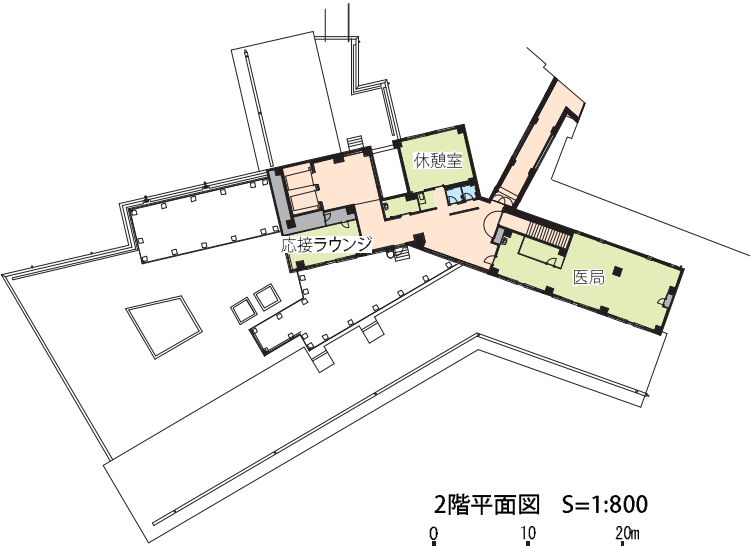
光風園病院・さくら寮・みどり園 全体配置図 S=1:2,500



ロビー階平面図 S=1:800



1階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800

0 10 20m
scale 1/800



竣工後初めての春の様子

上：新病棟正面玄関付近
下左：アプローチスロープ付近を見上げる
下右：老人保健施設さくら寮増築部をさくら越しにみる



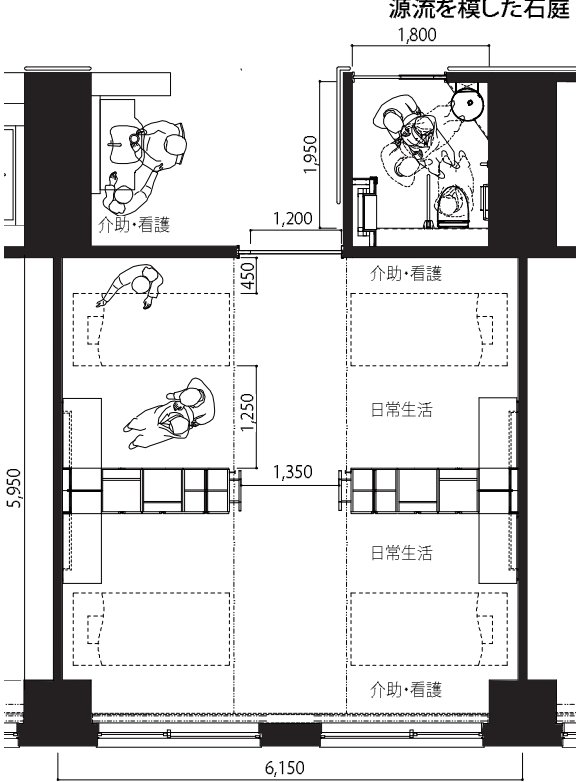
光風園病院は、山からの清水に恵まれている。ふんだんな山水を循環可能な配水系統によって散水や貯水槽の原水に利用している。
また、山から海へのつながりをテーマとして、地下工事の際に発掘された岩石を再利用し、川の流れと海へのつながりを見立てた石庭をしつらえた。木立を模した、アプローチ空間の壁面を抜け、水の音が微かに響くエントランス空間に至る経路は、光風園病院のさりげないホスピタリティーを表している。



源流を模した石庭

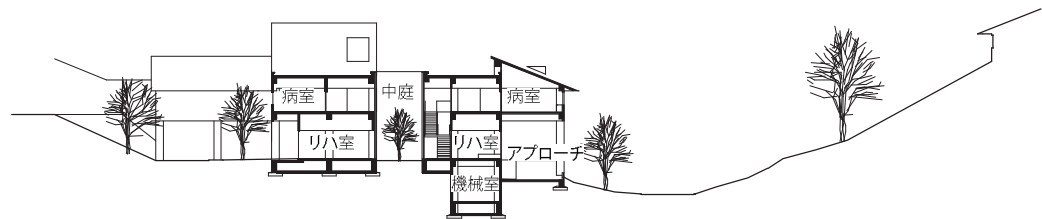


上：波を模したタペストリーガラス
下：木立を模したアプローチの壁

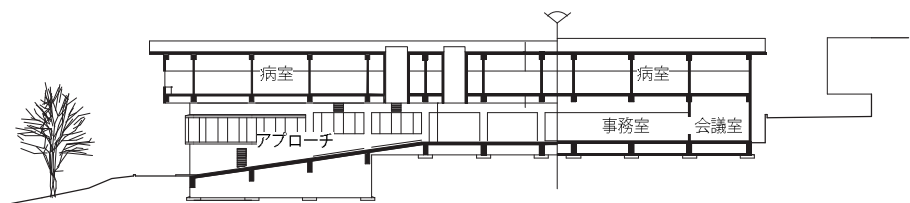


4床室まわり寸法体系 S=1:100

建物全景



断面図1 S=1:800



断面図2 S=1:800



右：日常生活の場所は幅を1250以上とり、家具下を入幅木にして、車いすの取り回しに配慮した。収納は、奥行きを重視し、背板になるところは、掲示スペースとして、自由に使えるようにした。

右下：トイレは、1方向の回転で入室、排泄、手洗い、退室までコンパクトにこなせるよう工夫した。



上：食堂から中庭を見る 下：スタッフステーション

「光風園」病院をすべての場所で体現できるようにしたいと考え、患者の居場所をもとより、スタッフのスペースにも光と風が行き渡る病院を設計した。



上：4床室ベッドまわり 下：トイレと洗面コーナー